

# 自慢・我慢



もともと仏教の専門用語であったものが、イング・中国・日本と三千年かけて渡って来る間に変化し、ときには完全違った意味で使われる場合があります。

例えばこの「我慢する」とは、「辛抱づよく耐え忍ぶ」意味につかわれているが、實は全くといっていいほど逆な言葉です。

## 「慢」

お釈迦さまが「これが眞実・眞理」とさうたのは「因縁の法」と伝えられています。

「法」とは「存在するもの」。すべてのものやそこからは、数えきれないほどの原因や条件が重なり合い絡み合って成り立っているもの。「一つや二つの原因で成立しているものはない。当時インドの人は、血筋・家柄で輪廻転生(いつまでも変わらず、同じ身分に生まれ変わるというカースト制度)を信じていました。

固有単独の原因や条件ではものは存在しない。(だからすべてのものは個我というものはかい。無我)。条件の一つが変わったらちまちつねに変化して行く。(無常)。

ものやこころは、いったいどういう成り立ちをしているのか。物質面を深く分析探求していくアビダツマ『俱舍宗』。こころの面を分析探求した人たちを『唯識宗』と呼びます。

わたしのこころを分析検討した仏教学者たちはこころ(心王)とその働き(心所)、両面からわたしのこころの動きを解析しました。

こころは、いろいろな「煩惱」によつてうごかされています。「貪(むさぼり)・憤(にくしみ)・疑(うたがい)・慢(ねたみ)などなど」。

「慢(ねたみ)」というのは「たかぶり」です。唯識教学では七つの慢を数えます。「自己中心のたかぶり」です。

慢・過慢・慢過慢。

た上位の人いたいしても  
「俺はあいつも上だ」。人を見下す差別して自分を誇る。

「同じ学校だったが成績は俺が上だった」、  
「威張っているが、もともとおれの同僚さ」。

次ぎに「増上慢」。俺ほどの者はないと  
う、どうにも手のほどこしようのない「高上  
がり」。「邪慢」、全く道理にあわない尊大  
ぶり。オウム真理教教主など。

最後は「卑慢」。見せかけの卑下。謙虚な  
態度を売り飛ばして自分の謙虚さを自慢

していませんか。

これは決して理論や学問ではありません。  
人ごとではなく今の自分を分析し懺悔して  
いるのです。

あなたはどうでしょうか。自慢・我慢のな  
かで暮らしていませんか。

このように厳しく自分に問いかけるのがお  
釈迦さまの説かれた『仏教』です。

# はかがいく



もともと稻や茅を植えたり刈ったりすると  
き設定した範囲が「はか」。仕事が「はかど  
る」。仕事の「能率があがる」「はかが行く」  
など。

「はかばかしく」は、設定した仕事の範囲が  
順調に進捗した(かたずいた)ことと転用  
された。

## うだつがあがらぬ

江戸時代、民家の建物の屋根の両側に「卯」  
の字の形をした棟持柱を掲げた。この「う  
だち」は、お金持ちがその権威を誇示するため  
設けたもの。だからこの「うだち」が上げ  
られないのは、いくらがんばってみても身分  
がパットしない、出世もできない、芽がでない、  
名が上がらない。

## 天罰てきめん(観面)

「てきめん」とは昔、ご主君さまとともに  
パッと顔を見る、顔を合わせことで、ものご  
と即決。目の前で即座に決まる。

「いくら親の目を盗んで悪事にはしつたと  
て……だよ」という具合に使う。

# 永代経ご案内

日 時 七月八日(金)一九時三〇より

九日(土)一三時三〇より



講師

護山智孝 師

平成二十三年六月五日  
小人 古田 ふく 百七歳

二日(土) 七月 勝林寺 予定  
勝林寺おみがき・清掃奉仕(音)  
出石組仏事報告総会 本覚寺  
岡野 隆宅 三三回忌  
田中和子宅 五〇回忌  
勝林寺 仏婦総会 永代経  
正福寺 永代経

三日(日)

五日(火)

八日(金)

九日(土)

八日(金)

九日(土)

# 有為法

「有為法」とは無数の因縁条件によつてつくられたもの。現象世界に存在しているもの。原始仏教では七十五法とか百法と数える。「在るもの」すべて。わたしという存在も有為法。常なく変転するもの。「有為の奥山今日越えて」というあれ。

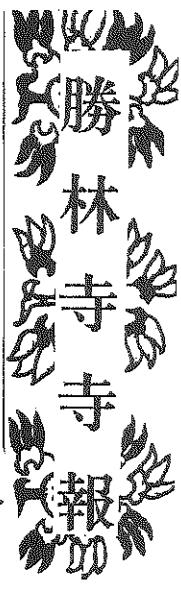
◎自信教人信  
難中転更難  
大悲弘普化  
真成報仏恩  
自らが信じそれを人に教える  
難中の難よりも更に難しい  
大悲の中にいる身と知つて  
仏恩報する身となるのだ

「難中転の転」はウタタと読んで「なおその上に」の意味。この部分は「大悲転普化」（大悲転じてあまねく化す）、「大悲弘普化」（大悲ひろくあまねく化す）両方の読みがあるが意味は同じ。これは善導大師の『往生礼讃』（初夜偈）のなかで歌われる一節。

一般にこの偈の前二行が「布教伝道」のテーゼ（綱領）のように理解され、「自分がまず信せねば人に教えることは難しい。まず信じそれを教えましょう」と教師のこころえの如く見られているが、とんでもない誤解。真意は「人に教えるなど、とてもわたしにできることではない」との悲嘆の言葉。

人に教える以前に「その愚かな私のうえにいつも働いていてくださる如来の大悲を知る。それこそが真に如来の御恩におこたえする」とになるのだ」というところです。

老いた今の今まで、偉そうに自分の「かいしょ」で生きてきた如くに生きて来て、しかし若い者に教えよう導いてやるう、せめて出来ぬまでもボランティアなどもしてやろうなど、まことに不遜極まりない生きざま。その懺悔のおもいのなかで「おもいで」を



たどってみると、みなみな「おかげさま」のなかで育てられて生きている」とに気がります。

都の赤き火の  
日暮れ恋しき 春なれど  
私は乙女の 夢すてて  
ほのかに 咲ける 山桜

知的論理的ではない。革新的進歩的積極性もない。どちらかといえば消極的日々見型叙情的、いうなれば女性的といってよいかもしれぬ。わたしの幼年期は、父母も死に弟も早く亡くなつて、姉と妹の間で育つた。ほかには祖母、「お出入りのおばちゃん」二、三人。女中さん。しかも昭和初期。まだ例の大正ロマンの雰囲気が残つて、いた。

家の庭には杏（あんず）。すもも・ビワの  
大木もあって、季節にはその果実がおやつで  
あつた。その花の下で姉たちにキンダーブック  
や少女雑誌を読んで貰った。覚えた歌も、  
大正時代の「童謡」。「青い目をしたお人形  
とか「からたちの花」や「この道は」などな  
ど。

いまでは忘れ去られた「童謡集」にもない歌を今でも懐かしく思い出す。

たんきほんき たんこりりん

卷之三

かうすが  
ここにまつり、アヌ

たん物語たんものがたり

卷之三

おひがんまいりも つづいてる

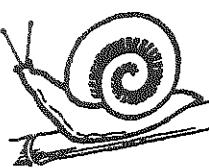
これは昭和になってからの歌たが、これもいまの歌集からは消えてなくなつていて。

一木のひ女  
因縁裏をとじて はや七日

納屋の南の粗壁に  
あてられてみれば、妻ある

講義の範囲

父と母との ふるさとの  
村にうまるる うれしきを  
雪とけ水よ 歌えかし



わたしの家には学校に近いせいもあって、いつも先生が下宿しておられた。「家庭教師お抱え」のようなもので、頭の良くないわたしがなんとか小学校卒業できたのも、これら先生方のおかげと、はずかしながら感謝している。

新しい父は、「世話ずき」というのか 我が身を忘れて人の世話に打ち込む人であったS寺のご住職が兵隊にとられて不在となる

眼病が癒えて弘道小学校にかえってきたのは昭和十年。實の父母なきあとであるので福知山の叔父と叔母が義父義母として出石にかかり、それで早速庫裡（くり）改築が始まった。新たな家に入ったのは昭和一年の夏であったように思う。

家も父母も、それから学校の講堂のたたずまいもみんな一変していた。

講堂のステージが西から東へ変わっていたそれに二つあるクラスの一つが「男女組」になっていた。わたしは「おとこ組」で、できの良くなき組に入れられた。しかし先生がたからは大変可愛がられた。海軍さんから先生に転向した新任の大森先生は、たとえば学芸会の劇にはいつも私に演出を相談してくださった。爾来わたしは演劇のエキスパートのようになり、高校の先生を辞めるまで学生演劇にかかわってきた。

眼病が愈えて弘道小学校にかえってきたの  
れたし、京都の平安中学のころも、姉はいま  
の京都女子大（当時は京都女專）に在学して  
いて一緒に下宿を転々とかわりながら世話を  
してくれた。

とくに、出来の悪い私だのに父はいつも  
信じ慈しんでくれた。人前で私の作文やレポートを自慢したり、腹の底から信じてくれていた。

不勉強で怠惰・愚昧なわたしが、今日まで世間をわたつて来れたのは父母をはじめ思い出して数えきれないほどの方々のご恩と、いまになつて気づくのである。

「おれが・わたしが」で我執煩惱に生きてきた私であつたが、（覚えているかいないかにかかわらず）無数な条件、ご縁・御恩のはたらきかけのなかで生かされてたわたし。  
わたしはオーケストラが好きだ。たくさん違つた音色の楽器がそれそれ違つた音を出して一つのハーモニーとして特殊な世界を作り上げていく。混声合唱も同じだ。ちがつたいくつものパートが関係しあいかかわりあって一つの世界を醸し出す。その調和の美しさなどにか大きな光りのなかで花花や木の葉が絡み合い関係しあつて春のまた秋の情景を醸し出して行く。「いのち」はそのようにつくりだされたもの。わたしはそのように思う。  
わたしの思慮分別を越えたなにものかにつまれて今を生きている。だからいまさら私の小さな思慮分別はやめて、自然法爾の如来大悲のなかに、のこされた一日一日を生き、そして生き絶えていけばそれが一番の幸せではないのか。「有為の奥山今日こえて浅き夢みじ酔いもせず